

平成 30 年 9 月 7 日現在

機関番号：35502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21550

研究課題名(和文) 教員の資質能力向上を支援する次世代型教員養成プログラムの構築を目指した基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research aiming at the construction of the next generation type teacher training program that supports improvement of faculty ability of qualities

研究代表者

前田 一篤 (MAEDA, KAZUMA)

徳山大学・経済学部・講師

研究者番号：20733231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では教員が抱えるリスクを克服する過程に着目し、それを克服するときに発揮される能力の測定尺度の開発と、それらの発揮場面および形成・変容の過程を明らかにすることを目的として実施した。本研究から、まず中等教育段階における教員の「レジリエンス」を測定する尺度の定型化がされたことが挙げられる。また、若手保健体育科教員のリスクと「レジリエンス」の関連についても事例的に検証し、重要な示唆が得られた。課題として、中等教育段階における教員の「レジリエンス」について追加調査を実施し、その強化に関する糸口を得る必要性がある。

研究成果の概要(英文)：In this research, focusing on the process of overcoming the risks facing teachers, in order to develop the measurement scale of the ability to be demonstrated when overcoming it, and to clarify the process of their demonstration and formation and transformation Carried out. From this study, it is pointed out that the standardization of the scale for measuring "resilience" of teachers at the secondary education stage was done. In addition, the relationship between the risk of young physical education teacher and "resilience" was examined as a case, and important suggestions were obtained. As an issue, there is a need to conduct additional surveys on the "resilience" of teachers at the secondary education stage and to gain a clue as to how to reinforce them.

研究分野：保健体育教師教育

キーワード：教師教育 保健体育教師教育 レジリエンス 教員のメンタルヘルス

1. 研究開始当初の背景

近年、学校現場における教員のメンタルヘルスの悪化が深刻な状況となっている。この問題に関して、教職員のメンタルヘルス対策検討会議(2013)は「教職員のメンタルヘルス対策について(最終まとめ)」文部科学省(2013)の中で、精神疾患による教員の病気休職者数は平成23年度には5,274名となり、依然として高水準で深刻な状況であると報告した。また、教職員の精神疾患の増加は、休職期間中の給与保障や代替教員等の配置による財政的負担も伴うことから、教職員のメンタルヘルス対策の充実・推進を図ることが喫緊の課題となっている(文部科学省, 2013)。

教員のメンタルヘルスに関連して、これまでは、教員におけるストレスやバーンアウトについての研究が多くなされてきた(例えば、新井, 1999; 齋藤)。また、近年には、教員の職務遂行上における悩み事についての研究も見られるようになってきた(例えば、岩田, 2012; 高島, 2013)。これらの先行研究から、教員はどの年代においてもストレスや悩み事を有していることが明らかになった。また、教職経験年数や担当教科によってそれらは変化することが示唆された。しかし、先行研究からは教員がストレスや悩みを克服するまでの経緯や変容を読み取ることはできるが、その過程において具体的にどのような要因が影響を及ぼしているかは言及されていない。

他方、メンタルヘルスの維持に有効なものとして、「レジリエンス」(Grotberg, 1999)という概念が注目されている。「レジリエンス」とは、ストレスや悩みの克服に寄与する人間の能力であり、その人が置かれる環境や経験によって変化するものである。また、強化することが可能な能力であるとされている(長内, 2004)。教員の「レジリエンス」についても、紺野ら(2006)や木原(2007)によってその因子についての検討がなされている。しかし、双方(紺野ら, 2006; 木原, 2007)とも校種や教科の特徴については言及されていない。また、教員の「レジリエンス」はどのような場面でどのような因子を發揮し、困難を克服しているかについても検討するに至っていない。学校現場における教員のメンタルヘルスの悪化が叫ばれている現在、教員が抱えている困難や、それらを克服する過程と要因をより具体的に解明していくことは、今後教員をサポートするための重要な示唆となるに違いない。

以上の背景に加えて、若手教員は様々な面で未熟であるため、その職務の過酷さからメンタルヘルスに悪影響を及ぼしやすいこと(鈴木ら, 1991)や、保健体育科教員は、その職務の特徴から過酷な状況にあること(松田, 2010)が指摘されている。

2. 研究の目的

本研究では教員が抱える困難を克服する過程に着目し、困難を克服するときに發揮される能力の測定尺度の開発と、それらの發揮場面および形成・変容の過程を明らかにすることを目的とする。とりわけ、研究対象としては、その職務に特徴を持つ(松田, 2010; 岩田, 2013)と報告されている、保健体育科教員を中心に検証していくこととする。具体的な研究課題としては、以下の3点である。

教員が困難を克服する要因の切り口として、教員の「レジリエンス」に焦点を当て、その測定尺度を作成、および因子間の因果関係を解明する(研究課題)。

保健体育科教員が苦悩を克服する過程を横断的に調査し、「レジリエンス」の發揮場面と、その形成・変容の過程を明らかにする(研究課題)。

と同様の調査を保健体育科以外の教科担当の教員を対象として行い、研究課題の結果との比較検討から、教員の「レジリエンス」の形成・変容過程とその要因を解明する(研究課題)。

3. 研究の方法

本研究は、3年間(平成27~29年度)の研究期間をもって実施する予定である。本研究は、量的・質的の両側面からアプローチする「混合研究法」(クレスウェル, 2010)を適用し、教員が抱える困難を克服するときに發揮される因子の測定尺度の開発と、「レジリエンス」の發揮場面および形成・変容の過程を明らかにしていく。具体的な研究計画・方法としては、以下の3点である。

1年次では質問紙調査を実施し、教員における「レジリエンス」の測定尺度を作成し、因子間の因果関係について明らかにする(量的調査)。この時、校種や教科の差異についても検証する。

2年次には保健体育科教員を対象としてインタビュー調査を実施し、教員の置かれている現状やメンタルヘルスに関わりについて明らかにする(質的調査)。なお、詳細な調査内容としては、職務遂行上の困難(ストレスや悩みとなっている要因)および何をもってそれらの困難を克服しているかについてである。また、量的調査については継続的に調査を実施する(量的調査)。

3年次には、過去2カ年の調査を継続的に実施する(量的調査・質的調査)とともに、保健体育科以外の教科担当の教員を対象として2年次と同様の調査を実施する(質的調査)。これらを総括的に分析して、教員の「レジリエンス」を向上させる要因について検討する。

4. 研究成果

本研究では教員が抱えるリスクを克服する過程に着目し、それを克服するときに発揮される能力の測定尺度の開発と、それらの発揮場面および形成・変容の過程を明らかにすることを目的として実施した。その成果として、以下に示す。

本研究の成果として、中等教育段階における教員の「レジリエンス」を測定する尺度の定型化がされたことが挙げられる。

まず、中等教育段階の教員を対象に「レジリエンス」に関する質問紙調査を実施し、探索的因子分析を行った。その結果を、表1に示す。

表1 因子分析の結果

| 因子名と質問項目 | 因子負荷量 | | | | |
|-----------------------------------|--------------|--------------|----------------|--------------|--------------|
| | I. 人間関係 | II. 自己研鑽力 | III. セルフコントロール | IV. 感受性 | V. 社交性 |
| I. 人間関係 (α=.884) | | | | | |
| 3 悩み-相談を聞いてくれる仲間がいる | 0.843 | 0.02 | -0.036 | -0.021 | -0.052 |
| 18 困難に、悩みや相談を聞いてもらっている | 0.83 | -0.008 | -0.134 | -0.093 | -0.017 |
| 37 思ったとき、同僚に相談を求めることができる | 0.792 | -0.032 | 0.026 | 0.064 | -0.025 |
| 39 同僚と、話していることはいいことを話す | 0.756 | -0.14 | 0.05 | 0.06 | 0.026 |
| 23 同僚や友人に、悩みや相談を聞いてもらっている | 0.608 | 0 | 0.017 | -0.205 | 0.157 |
| 27 悩み-相談を聞いてくれる家族や友人がいる | 0.587 | 0.176 | 0.052 | -0.224 | 0.08 |
| 50 周りの先生を参考にしている | 0.562 | -0.063 | 0.032 | 0.254 | -0.082 |
| 43 モデルとなる先生が周りにいる | 0.514 | 0.008 | 0.05 | 0.138 | -0.141 |
| 19 仕事以外で付き合いのある関係がある | 0.445 | 0.032 | 0.004 | -0.039 | 0.128 |
| II. 自己研鑽力 (α=.831) | | | | | |
| 48 自分自身を高めたり、何かを学んだりする姿勢を大切にしている | -0.026 | 0.7 | -0.122 | 0.021 | 0.009 |
| 4 目標に向かって努力する | 0.094 | 0.612 | -0.172 | 0.158 | -0.021 |
| 40 学習環境を自分なりに作る | -0.06 | 0.604 | 0.09 | -0.112 | 0.039 |
| 36 失敗しても、その次はまっすぐに立て直す | 0.128 | 0.6 | -0.03 | 0.193 | -0.098 |
| 39 自分には足りないところがあると思え、それを補うために努力する | 0.01 | 0.581 | 0.004 | 0.144 | -0.014 |
| 17 自分自身の成長を振り返り、反省することができる | -0.125 | 0.57 | 0.037 | 0.031 | 0.068 |
| 11 自分の目標の達成のため、新しいことも積極的に取り入れる | 0.057 | 0.56 | 0.003 | -0.08 | -0.01 |
| 26 授業外でも、自分の研鑽に専念している | -0.078 | 0.542 | -0.015 | -0.277 | 0.08 |
| 14 一つ一つのことに真剣に取り組むことができる | 0.002 | 0.526 | 0.065 | 0.084 | -0.115 |
| 18 いろいろなことにチャレンジするのが好きだ | 0.025 | 0.508 | -0.216 | -0.105 | 0.001 |
| 7 授業に一生懸命に取り組んでいる | 0.009 | 0.436 | 0.101 | 0.052 | 0.048 |
| III. セルフコントロール (α=.855) | | | | | |
| 32 心配事は後まで引き延ばさない | -0.035 | 0.032 | 0.901 | -0.007 | -0.062 |
| 20 仕事を優先することはすぐにできる | -0.061 | -0.066 | 0.812 | 0.079 | 0 |
| 24 困難についてじっくり考えすぎず、割り切る | 0.027 | 0.049 | 0.792 | -0.079 | -0.048 |
| 2 学校にあまり関係がなさすぎない | 0.044 | -0.031 | 0.713 | -0.108 | 0.111 |
| 22 断念しても、自分を責めず立ち直ることができる | 0.108 | 0.074 | 0.403 | 0.254 | -0.033 |
| IV. 感受性 (α=.817) | | | | | |
| 49 人の気持ちや、態度や表情の変化を読み取ることができる | -0.006 | -0.096 | -0.033 | 0.911 | 0.035 |
| 45 人がどんなことを考えているのかわかる | -0.066 | 0.005 | 0.035 | 0.706 | 0.07 |
| 44 生徒の気持ちに敏感に気づく | -0.06 | 0.091 | -0.069 | 0.67 | 0.091 |
| V. 社交性 (α=.794) | | | | | |
| 11 人と関わりあうのが得意である | 0.109 | -0.025 | -0.096 | -0.011 | 0.866 |
| 41 誰かを助ける | -0.112 | 0.03 | 0.009 | 0.059 | 0.737 |
| 1 人との関係を築くのが上手だ | 0.006 | 0.017 | 0.079 | 0.244 | 0.5 |
| 34 交友関係が広く、社交的である | 0.124 | 0.042 | 0.15 | 0.177 | 0.412 |
| | I | 0.445 | 0.282 | 0.392 | 0.245 |
| | II | - | 0.276 | 0.46 | 0.311 |
| | III | - | - | 0.293 | 0.359 |
| | IV | - | - | - | 0.33 |
| | V | - | - | - | - |

第1因子については、項目48「自分を高めたり、何かを学んだりする姿勢を大切にしている」や、項目28「いろいろなことにチャレンジするのが好きだ」など計16項目から構成されていた。このことから、今ある現状や、自らの能力・思考についてより良いものに改善させようとする姿勢を表す項目から成っていると解釈できるため、「自己研鑽力」と命名した。

第2因子については、項目3「悩み・相談を聞いてくれる同僚がいる」や、項目23「家族や友人に悩みや相談を聞いてもらっている」、項目43「モデルとなる先生がいる」などの計10項目から構成されていた。このことから、職場内外で悩みなどを相談することが可能な相手の存在、または相談している相手の有無や、理想となる人物の存在があることを表す項目から成っていると解釈できるため、「人間関係」と命名した。

第3因子については、項目32「心配事は後

まで引き延ばさない」や、項目24「問題についてじっくり考えすぎず、割り切る」、項目22「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」などの計7項目から構成されていた。このことから、ネガティブな状況においても自らの思考を調整し、精神的に安定させる姿勢を表す項目から成っていると解釈できるため、「セルフコントロール」と命名した。

第4因子については、項目49「人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取ることができる」や、項目45「人がどんなことを考えているのか予測できる」などの計3項目から構成されていた。このことから、他者が意図的に表現していないことも察知し、それを推測できる能力を表す項目から成っていると解釈できるため、「感受性」と命名した。

第5因子については、項目11「人を笑わせるのが得意である」や、「人との関係を取るのが上手だ」などの4項目から構成されていた。このことから、他者との関係性についてのポジティブかつ対外的な言動を表す項目から成っていると解釈できるため「社交性」と命名した。

以上の5つの因子において、信頼性の検討のため、クロージャの係数を算出したところ、全ての因子において.70以上となり、良好な内的整合性が確認された(表3)。

次に、得られたサンプルを保健体育科教員と他教科教員に分け、その下位尺度得点の差について検討した(表4)。その結果、第3因子の「セルフコントロール」($t = 2.39, df = 70, p < .05$)有意な差が得られた。なお、サンプル数を考慮して効果量についても算出したが、同様に有意な結果($.10 < r < .18$)が認められたため、有意差は妥当であると考えられる。

最後に、保健体育科教員および他教科教員における「レジリエンス」の下位尺度間の相関について検討した(表5および表6)。その結果、保健体育科教員においては第1因子「自己研鑽」、第3因子「セルフコントロール」、第4因子「感受性」、第5因子「社交性」の間で有意な相関がみられた(表5)。一方、他教科教員においては、全ての因子において有意な相関関係が確認された(表6)。

次に、「教員レジリエンス尺度」を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。まず、探索的因子分析の結果をもとに観測変数と潜在変数のパス図を作成して分析を行った。その結果、適合度指標は $2 = 1211.333, df = 454, p < .001, GFI = .760, AGFI = .721, CFI = .778, RMSEA = .084$ であった。この結果から、それぞれの潜在変数における相関係数の高い観測変数を、内容の重複を考慮して3項目ずつ選定し、再度分析を行った。その結果、適合度指標は $2 = 149.311, df = 80, p < .001, GFI = .925, AGFI = .887, CFI = .943, RMSEA = .061$ となり、適合度に高まりがみられた。なお、自己研鑽力とセルフコントロールの間にはほ

とんど相関がみられなかったためパスを削除して分析を行ったが、適合度が低くなる結果となったため、全ての潜在変数の間に正の相関があるものとした。図1に最終的なモデルを示す。

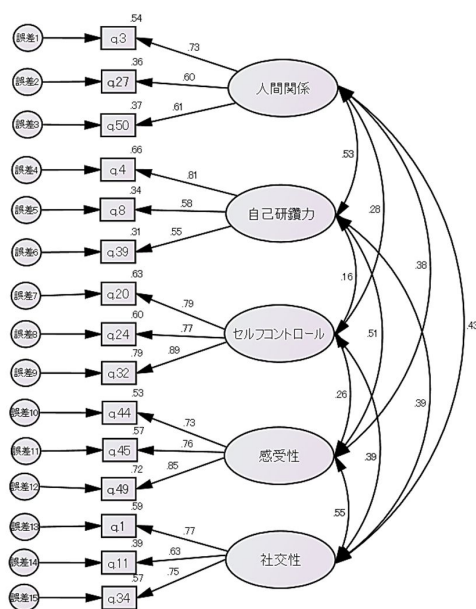


図1 共分散構造分析の結果

本研究で得られた成果として、中等教育段階における教員の「レジリエンス」の因子は、「環境資源」である「人間関係」と、「個人内資源」である「自己研鑽力」、「セルフコントロール」、「感受性」、「社交性」で構成されていることが明らかになったことが挙げられる。これらの全ての因子間に正の相関があることが示されている。また、教員は職務遂行上のリスクを克服するにあたって複合的に「レジリエンス」を発揮していることが推察できることから、既存の尺度では測定し難い側面があることが示唆された。したがって、本研究で得られた尺度は、中等教育段階における教員の「レジリエンス」を測定する新たな尺度として存在価値の高いものとなると言える。

ただし、課題も残されている。本研究では質的調査として、若手保健体育科教員のリスクと「レジリエンス」の関連についても事例的に検証し、重要な示唆が得られたが、その一般化に課題が残されている。なぜなら、対象者の属性に偏り（性別、教職経験年数、赴任している学校、役割など）があり、必ずしも「レジリエンス」との関連が示されていないからである。したがって、今後の課題として、中等教育段階における教員の「レジリエンス」について追加調査を実施し、その強化に関する糸口を得る必要性がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

前田一篤・齊藤一彦・岩田昌太郎・川口諒、中・高等学校教員における「レジリエンス」の測定尺度の検討、日本体育学会、2017

Ryo KAWAGUCHI, Hiromasa IMAJO, Aiko HAMAMOTO, Kazuma MAEDA and Ayaka ISEKI, A case study on the improvement of reflection via micro-teaching in pre-service teacher education : Focusing on student's reflection while observing other teachers' micro-teaching、Association for Teacher Education in Europe、2016

Ryo Kawaguchi, Shotaro Iwata, Kengo Kakazu and Kazuma Maeda、The Development of Pre-service Students' Reflection in Micro-teaching、PETE & HETE Conference、2015

〔図書〕(計 1 件)

木原成一郎・徳永隆治・村井潤 編 前田一篤 他 著、創文企画、体育授業を学び続ける～教師の成長物語～、2015、p. 75, 82

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

前田 一篤 (MAEDA, Kazuma)

徳山大学・経済学部・講師

研究者番号：20733231

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

齊藤一彦 (SAITO, Kazuhiko)

木原成一郎 (KIHARA, Seiichiro)

岩田昌太郎 (IWATA, Shotaro)

川口諒 (KAWAGUCHI, Ryo)